

「半夏生」——その後——

浜田 道雄

先日「半夏生」という題の小文を「書こう会」に出したところ、Mさんから『「半夏生」というから、てっきり『タコ』の話かと思っただ』とのコメントをいただいた。Mさんの故郷神戸では、「半夏生」の日には「タコ」を食べて豊作を祈る風習があるという。

これは思いもしないご指摘だった。私はこれまで「半夏生」については「雑節」の一つで、「夏至を過ぎたある日」をいうとしか知らなかった。東京では「半夏生」は「節分」や「八十八夜」のような季節感をもってはいないから、「タコを食う」という催事があることなど調べもしなかったのである。

しかし「半夏生」という言葉には、その「日常ならざる」不思議な語感に心惹かれていた。それだからこそ七月の初めに訪れた北鎌倉の寺で夕闇に浮かび上がる「ハンゲショウ」の白化した葉に出会ったとき、そこに「日常ならざるもの」を見た思いがしたのである。あの世がこの世にふと姿を現した一瞬だと思った。

日本の文化風習は、その基層に「関東の文化」と「関西の文化」という二つの異なったものをもつという。日本の歴史はその東西文

化の長い相剋のなかで展開されてきた。だが、いまはネット社会。日本中の人が当たり前のようになんで情報を共有し、同じ日本語を話す（あるいは“同じように”考える？）と思われている。

そんな社会だから東西の相違などとくに克服されてしまったと思っていたが、どうやらそんなことはなく、「西」はまだしっかりと生き残っていたようだ。「半夏生にタコを食う」という風習はそんな図太く生き残っている名残りなのだろう。

と一旦は思ったが、どうやらこれは「西」に対する甘い見方だったらしい。「西」は考えていたよりもはるかに“したたか”で、東西は融合したのではなく、「西」が「東」を飲み込んでしまったようだ。

テレビの番組では「西」の「お笑い芸能」が毎日長い時間を占領して、しかも圧倒的人気を誇っているし、雑節の習慣だって「節分には豆まき」はいつのまにか駆逐されて、関西風の「恵方巻を食べろ」が喧伝されて久しい。

「半夏生」だって私が知らなかっただけで、東京のスーパーマーケットではこのごろは「半夏生、タコの日」と大書したチラシを張り出して大売り出しをしているというではないか。“商魂”の大阪、そのド根性に東京はいつの間にか圧倒されてしまったのだ。

いやいや、商魂だけではないゾ。政治だって、「維新の会」は“錦の御旗”を振りかざし、全国制覇を目指して国会でも急速に存在感を高めているではないか。アブナイ、アブナイ。